東京未来大学研究紀要 *Vol.17* 2023.3 pp.179 − 189

研究ノート

フォルメン線描の形成力
―方法論的認識の３側面の分析から―

髙 橋 文 子[1)]

Formative Forces of Form Drawing:
Based on the Analysis of the Methodological Recognition of the Three Aspects

Fumiko Takahashi

要 約

本稿の目的は，シュタイナー学校において低・中学年に必要な教科として実践されている純粋な形態を描くフォルメン線描を，形成力の観点から捉え直すために，それらの線描を方法論的認識の３側面（内容的／形式的／形成的）から検討するものである。具体的に４つの異なる場で描かれた線描群を，Ⅰテーマや主題，Ⅱ造形要素や構図，Ⅲ手の操作や技法等の側面から分析した。その結果，①山型の連続紋に比べ波型をなめらかに繋ぐⅢの過程に抵抗がある幼児の描画の実態（４，５歳児の調査），②基本的なフォルムを学びながら，手の運動が次第に調整されていくⅡとⅢの変容過程（第４学年），③型といえるフォルムの描画から次第にⅠを強め，独自の発想のフォルムに移行したＡ児の２年間の変容過程（４年～６年生）④歩行等の身体機能は低下するなかで描画の形成過程は保たれた事例（後期高齢者）が明らかになった。これらの考察から，フォルメン線描の形成力は，３側面のうち特に「Ⅲ形成的側面」の感性的な強弱のコントロールと空間把握に支えられていた。さらに「Ⅱ形式的側面」の律動のある形態と「Ⅰ内容的側面」の造形イメージにも相互に関わりあって質的上昇を促し形成力を高めることを実証した。

キーワード：フォルメン線描，形成力，身体性，内容的／形式的／形成的な側面，美術の方法論

1．緒 言

（1）フォルメン線描の教育的意図

R.シュタイナーによって子どもの成長のために必要な教科として創始されたフォルメン線描（Formenzeichnen）は，フォルム，かたち（Form）という名詞の複数形と，線で描く，素描する（Zeichnen）という動詞を結合した教科名であり，様々な形を描く意味が込められている[1)]。実際に，直線，曲線からなる様々な図形や様々な装飾紋様などが学年の課題に応じて描かれる。それは，具体的な体験を再現する線ではなくて，純粋な線である。

筆者は，これまでアート（芸術・美術）の分野の中でも原初的な「線を描く」ことについて，描画に反映される認識の変化，子どもの線描を育む教育的視点について検討してきた。フォルメン線描につい

１）髙橋 文子 東京未来大学こども心理学部（Tokyo Future University）takahashi-fumiko@tokyomirai.jp

ては,「発達」,「気質」,「運動」,「文化」という要素を重視し,「教育的線描論 - フォルメン線描と気質考 - 」において新たな可能性を検討し，その形成過程の「変容（メタモルフォーゼ)」に主眼が置かれた線描の教育であることを論じた[2)]。また，子どもの描画の発達段階は，形の認識の仕方とともに様式があり，特に命名期，図式期，多視点描法の前写実期においては受容的配慮が必要であることを論じた[3)]。

R.シュタイナーは,「教育芸術」という独自の教育方法を提唱し，1923年の講演において,「就学年齢にさしかかった子どもにも，すでにふさわしい芸術の活動がある」と示唆している[4)]。さらに「認識，生の形成，実践的な技能の練習のすべては，芸術への欲求へとひとつに合流するはずです。芸術の体験は，まなぶこと，みること，技能を身につけること，すべての意欲をになうはずです」と述べている。教育の根幹ともいえる「認識」,「生の形成」,「実践的な技能」の統合が芸術を通してなされること，そしてそれらの芸術の手段は意欲を担うことを主張した。

命あるものがかたちを変容させていくことは，疑う余地のない自然の摂理である。一方，止まるかたちに命があるがのごとくその形成過程を捉える見方には，異なる次元が必要となる。筆者の問題意識もまた,「形象／感性」,「可視／不可視」の異なる次元と，その統合の図られた感性的表象にある[5)]。フォルムを描く学習者はどのような方法論的認識を得て，どのような形成力を体得するのか，その形成過程に着目する。

（2）フォルム（Form）概念

シュタイナーの言説と，シュタイナー学校で実際に行われていることは，厳密に分けて考えなければならない。しかし，シュタイナー自身のフォルメン線描に関する言及があまりにも少ないため，後のシュタイナー学校の教師としてフォルメン線描の体系化に寄与したハンス・ルドルフ・ニーダーホイザー（高橋巌訳）[6)]，エルンスト＝ミヒャエル・クラーニッヒ他（森章吾訳）[7)]，ルドルフ・クッツリ（石川恒夫訳）[8)] Thomas Wildgrub[9)] の著書も同様に検討する。

フォルメン線描は，純粋な線描を取り上げて描くことを先に述べた。純粋な線とは何か。E･M･クラーニッヒは「たとえばイチョウの〈形態〉(Gestalt）という言い方とイチョウの〈フォルム〉(Form）という言い方をする。〈形態〉という概念では，特徴的に成長したイチョウが目の前に表れてくる。〈形態〉とは具体的な体験の領域に属している。それに対し,〈フォルム〉というのは，特殊ではなく一般である。」[10)]。「形態・Gestalt」は大きさを問題にするが,「フォルム・Form」は大きさを問題にしない。つまり，すべてのイチョウの葉は共通のフォルム原則をもち,「形態」は一枚一枚すべて異なる。フォルメン線描は,「形態」から抽出されたエッセンス的な「フォルム」を描くと捉えることができる。

（3）先行研究

シュタイナーの教育思想の研究は，子安美知子，新田義之，高橋巌，西川隆範，鈴木一博らを経て，広瀬俊雄，吉田武男，實松宣夫，酒井玲子，今井重孝，金田卓也，吉田敦彦，西平直，衛藤吉則，井藤元，池田耕作，柴山英樹などによって精力的に進められている。また，日本の７つのシュタイナー学校では，地域に根差した教育実践が行われ，社会的認知を得ている[11)]。フォルメン線描に関する詳細な研究の中で，筆者は茂木一司と西平正，井藤元，吉田奈穂子の言説に着目する。

①　「形態教育論」の示唆

茂木は,「シュタイナー学校のフォルメン線描」が高橋巌の邦訳によって日本に紹介された同年に,「フォルメンに関する一考察」（1）（1983年）及び同（2）（1986年）において，美術教育学形成の序の一端として,「かたちの教育－形態教育論」「いろの教育－色彩教育論」という２視点から美術教育学を捉える視座を示す[12)]。シュタイナー学校の美術教育は，水彩画における色彩体験とフォルメン線描による線描体験とが別個に行われ，フォルメン線描は形態教

育論として機能する。

② 「わざの習得・型の習得」の側面

西平はライフサイクル，エリクソンなど幅広い教育的見地から「教育人間学のために」(2005) において，フォルメン線描について人智学の用語を使うことなく詳細な論考を記している[13]。シュタイナー教育はある一面徹底した「わざの習得・型の習得」であるという見地を示し，教育的な型について言及している。「Kunst」をあえて多義的な「わざ，しかけ，技法」であると同時に「創造的，想像的」な芸術である「アート」と捉える。

③直観的な自然認識と創造活動の一体化の側面

井藤はフォルメン線描の意義を①言語教育（文字学習）への導入，②幾何学の準備学習，③　調和・対象感覚の育成，④気質教育への寄与，⑤治癒教育への寄与と規定する[14]。さらに，フォルムを静的にではなく力動的に捉えることの重要性を訴え「形態学Morphologie」を確立したゲーテ自然科学の文脈から，フォルメン線描は「創造的多様性を内に含んだ必然性（原型）を直観する実践」と規定する。そしてシラーが唱えた「追創造（nacherschaffen）[15]」こそが対象と一体化し，それを内在的に把握する「対照的思惟」となることをふまえ，フォルメン線描を直観が結ぶ自然認識と芸術的創造活動が一体化した実践と捉える論考は，鋭く本質的なものである。また，昨今の「MUSE」による脳波測定を通じた研究分析からは，シュタイナー学校における教員養成プログラムを支える理論とその実態の解明を積極的に展開している。

④　細切れでないエポック授業の側面

吉田奈穂子は国内外のシュタイナー学校の理念や教育内容，教育方法，学習者の反応など，詳細な取材内容を基に，一貫してシュタイナー学校の人間形成を目指す教育の可能性を主張してきた。自らニュルンベルク・シュタイナー学校の教員養成を経て理論的前提をふまえた上で，包括的なシュタイナー学校の造形教育を研究対象としている。日本のAシュタイナー学校の実地調査において，フォルメン線描は，1から4年生までは1年の間に2，3回に分かれて，午前中2時間数週間展開される「エポック授業」の中で扱われるという[16]。何週間もの間，毎日午前中は線描を描くことを可能とするシュタイナー学校の枠組みは，日本の教育課程の時間割の概念とは異なるものである。

以上，フォルメン線描について，形態教育論，教育芸術のもつ「わざ･型」の習得の側面，小学生にとって芸術創作活動が可能にする美的体験をふまえた自然認識，日本の教育課程とは異なる時空間で行われる前提から整理した。

（4）フォルメン線描における運動と形成力

フォルメン線描のモチーフとして，無限大を示す「∞」がある。一巡すると元の位置に戻るために，紙面から離れることなく連続して描くことが可能である。このモチーフや同様の数字の「8」を描くことを行動療法として取り入れた医師が田上洋子である。

そこで重視されるのは描画に伴う眼球運動であり，その補助としてフォルメン線描が用いられた。その描画は100回，500回と同一画面上で重なり，動きの軌跡が強められた画面には驚きがある。PTSDや脅迫神経症などの95の症例に対して，その成果が報告されている[17]。田上のトラウマからの解放を導く線描を用いた試みは，描画による身体の連動を強く示した。さらに，フォルムに対応した集中・開放などの気持ちを生み出す要素も示している。

フォルメン線描は，低学年ほどいわゆる空書で宙に描いてみたり，体を動かしたりする過程を経て，実際に描かれる。書道のように一気に仕上げるのではなく，始めは薄い筆圧で，何度も繰り返し描く中で，例えばスケーターが氷上に同一の円を描けるように，まず「運動プロセス」が「運動の軌跡」となり，線描が描かれる。これらは，フォルムの形成過程を重視しているが故の必然的な流れである。眼球の動き，日常生活の中の歩み等，私達は無数の軌跡を無意識に描いているともいえる。その動きを伴う過程は，時間の経過と空間性の中で，形成力の基盤とな

るものである。

（5）本稿の目的と問題の所在

筆者の研究課題は，義務教育で育てる（小学校図画工作科，中学校美術科）で育てる具体的な児童・生徒のコンピテンシーとその体系化である。本稿の線描教育と形成力の検証は，描画を成立させる子どもの基盤として身体性とその描画意識を検討するものである。本稿の目的は，シュタイナーが創始したフォルメン線描を，形成力の観点から捉え直すために，それらの線描を３側面の方法論的認識（内容的／形式的／形成的）から検討するものである。具体的な問題の所在を，以下のように設定する。

① 就学前の「ギザギザ/ゆらゆら」の描画調査から，どのような形成的側面の特徴を読み取ることができるか。
② 感性的表象である線描群の分析から，形成過程や動きの調整に関して，どのような傾向を得ることができるか。
③ フォルメン線描で培われる形成力とは，その土台となる身体性と描画意識とを関連付けて，どのように解釈することができるか。

２．研究方法

（1）分析の対象となる表象について

これまで筆者の問題意識から調査した以下の異なる場で描かれた４種のフォルメン線描群を中心に検討する。

①４・５歳児の描画調査「ギザギザとゆらゆら」

フォルメン線描の基本となる連続文様（こぎりのようなギザギザ線と波のようなゆらゆら線）の特徴を捉えて，描き分けることができるかという調査内容，担当教師が黒板に描いた線描を見て描いた線描群（2016年７月，東京都Ａ市Ｂ保育園年長児２クラスの２クラス）

②シュタイナー学校のフォルメン線描ノート

４年生女児２名が授業で描いたランニングフォルムや線対称，四面対象等の描画群（2000年英国南西部サウスデポン）

③家庭教育としてのフォルメン線描の実践例

登校前の朝に描かれた描画群（４年生の２月から６年生の３月，栃木県宇都宮市）

④高齢者のフォルメン線描の実践例

病歴のある85歳男性Ｇの描画群（2022年６月～８月，茨城県水戸市）

（2）研究対象と方法

上記のフォルメン線描の形成過程及び線描群，を研究対象とする。調査指標として図１に示した感性的表象の分析指標モデルを用いる。本稿において，描画群を感性と形象の統合されたことを強調するために，感性的表象と呼ぶ[18]。

作品を内容的（題材や主題の選択），形式的（イメージの生成手法，創造的視点，造形要素の構成），形

Ⅰ　内容的側面（テーマや表現主題等）の方法論
事物的内容から，意味的解釈や本質的直観を経て，象徴／説話的内容へと至る。

Ⅱ　形式的側面（形態や色彩，構図等）の方法論
造形要素や仮象（イメージ）が，感性的形式から質的拡充へ図られた効果的形式に至る。

Ⅲ　形成的側面（材料や技法等）の方法論
材料を変容させる諸技法の作用によって，質的変容へ至る。

図１　感性的表象の分析指標モデル図

成過程的（素材や技法等）な方法論の集積として捉えることは，美術の重層的な表現の解明の有効な一手法として用いる。

3．調査結果

（1）４・５歳児「ギザギザとゆらゆら」描画調査

①　概要

この直線と曲線の描画調査のきっかけとなったのは，筆者が小学１年生を担任していた当時，山型／波型の連続模様を区別して描けなかった児童に遭遇したことによる。特に，直線を進めた後に止まって向きを変えるという山型の方向転換が難しく，どちらも同じ波線の形態を示した。これらの形成力のポイントとなる停止して方向を変える動きの軌跡に関して，就学前の段階の幼児がどの程度操作できるのか，2016年７月に東京都Ａ市Ｂ保育園に依頼して，年長クラスの２クラスで行った。有効回収数は24であった。

調査方法は，黒板に保育士が二種の線を描き，それを真似て描くという形で行い，類型に当たっては，90％程描画の条件を満たしていればできていると判断した。表２に結果を示す。

②　山型と波型の描画の実際

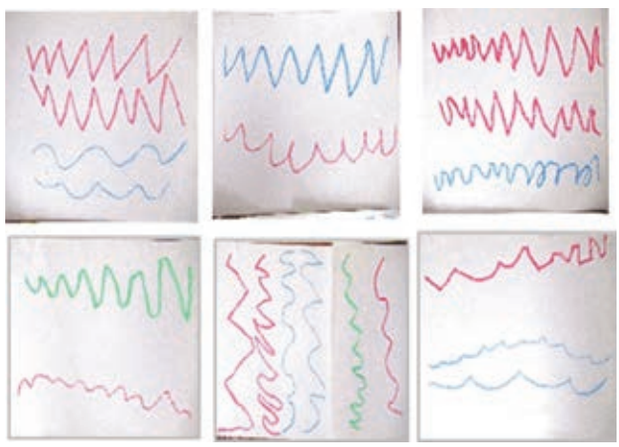
結果は,「どちらも描ける」「どちらも描けない」「片方だけ描ける：山型優位／波型優位」の４類型に分けられた。最も多かったは，類型２の「山型○，波型△」であり45.8％を占めた。次いで類型１の「どちらも描ける」(33.1％),「どちらも描けない」(12.5％)，類型３の「山型△，波型○」(8.3％）と続いた。

予想に反して５歳児にとって一番困難であったのは，直線の方向転換ではなく，波線の曲線をなめらかに繋げることであった。鋸の歯のような山型線については，約８割（79.1％）の幼児が描画技能として習得していたのに対して，波線は５割（41.6％）に満たない結果となった。描画例を見ると，図2-1はどちらも描ける類型１で，余白とのバランスがとられており，リズムも感じられる。図2-2，図2-3は，山型が優位であり，波線の一部に尖った部分や回転が見られる。図2-4は曲線優位で山型の方向に迷いが見られる。図2-5は横描きを手本として，上部を起点として縦に描かれた興味深い事例である。試行錯誤しながら描いた２枚を併せて検討し，２枚目を曲線優位と判断した。図2-6は類型４の事例で，左から右に連続模様を描くことはできているが，直線の方向性や曲線の動きが未分化である。

これらの描画群の調査は，特に時間と場によって支えられる「Ⅲ形成的側面」に深く関わり，意図的な動きと手の操作が連動する過程を示した。描くということは，進む，止まる，曲がるという分節化した一つ一つの動きの連動であり，特に曲線を滑らかに繋ぐ身体性を伴う形成力を確認した。

表１　未就学児の「ぎざぎざ／ゆらゆら」描画調査結果（n=24）2016.7.1

類　型		ぎざぎざ	ゆらゆら	度数	相対度数(％)
類型１	どちらも描ける	○	○	8	33.3
類型２	片方が優位	○	△	11	45.8
類型３		△	○	2	8.3
類型４	どちらも難しい	△	△	3	12.5



上段左より図2-1 ～図2-3：描画例①：類型１，描画例②③：類型２
下段左より図2-4 ～図2-6：描画例④⑤：類型３，描画例⑥：類型４

（2）英国サウスデポンシュタイナー学校の実践例

2000年調査当時女児Ｂが４年生の１年間に描いた線描例52点（フォルメン線描ノート２冊：縦29×横

35.5cm　表紙を含めた28頁と24頁で構成）と同女児Ｃが４年生の後半に描いた描画例28点（同１冊：28頁）を分析対象とした[19]。

① 対称をテーマにした描画の実際

図３は，研究対象としてあげた４年生Ｂ児のシュタイナー学校のフォルメンノートの７頁目のシンメトリーの補完を補う描画例である。特に中心線が強く描き込まれ，右側のなめらかな曲線の様子から，こちらを始めに描いて，次いで鏡像としての左図を描いていることが想定される。補完部分は，多くのシュタイナー学校でなされているように目立たない黄色で下描きがなされている。動きを確かめてから赤色を乗せているにもかかわらず，中心線からの距離が離れ，結び目の方向に迷いが見られる。この２つの小さな円の重なりを含むシンメトリーの補完が10歳児にとって容易でないことを示している。

３側面の抽出事項としては，Ⅰ内容的側面は，中心線の意識や背景のぬり込みやなどからバランスを整えようとする美的な意図が読み取れる。Ⅱの形式的側面で特に強調されるのは，しっかりと赤色を選択して描かれている曲線である。先に述べた形態からフォルムへ移行する過程の描画である。Ⅲの形成的側面では，蜜蝋クレヨンを持つ手の運動が意図され，美的な律動を生み出す動きの作用を確認した。

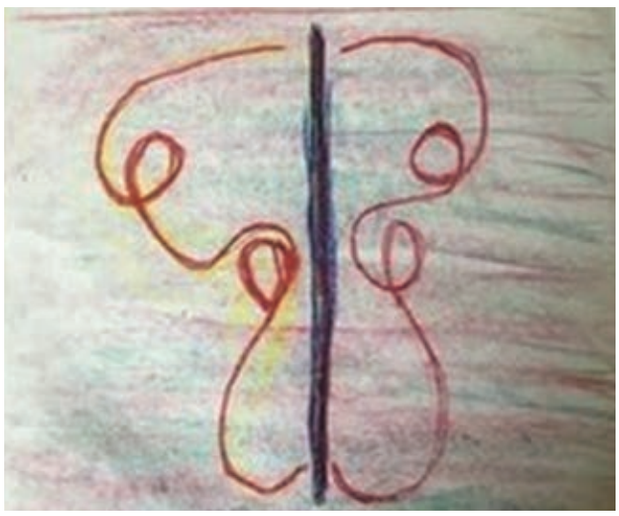


図３　シンメトリーを補完する描画例
イギリスサウスデボンシュタイナー学校４年生

② 時間をかけて培われる形成力の実際

図４群は，前出の図３と同様女児２名のフォルメンノートの描画例である。ここで取り上げられるフォルムを分析する。

図5-1と図5-2はＱのように右下に結びのあるランニングフォルムの曲線（左図）と直線（右図）の課

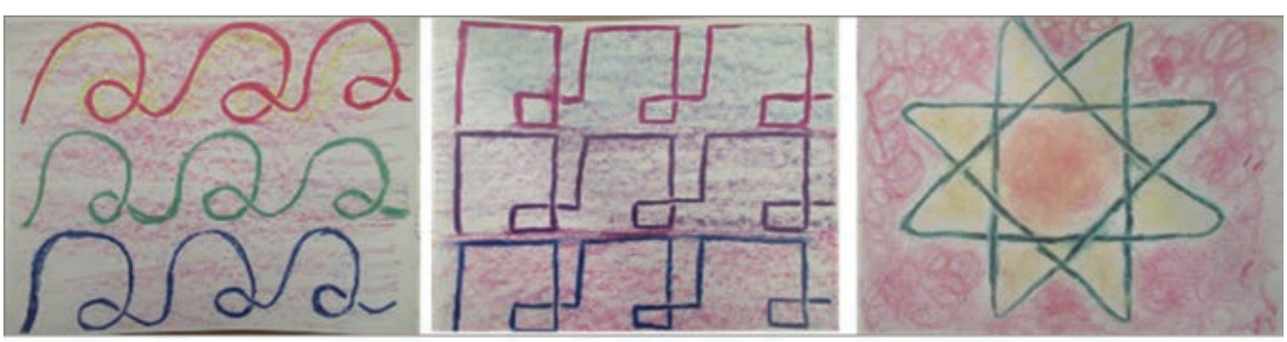


図4-1，4-2，4-3（上段：10歳女児Ｂの描画例）

図4-4，4-5，4-6（下段：10歳女児Ｃの描画例）

題である。それぞれの動きのリズムをよくつかんで安定した形成力を発揮している。背景部分はブロッククレヨンで薄く彩色されており，図と地の両方にアプローチしているのが特徴である。毎週の授業の中で１枚１枚，ていねいに仕上げられていることが伺える。

図5-3は，一筆書きで描ける八芒星であり，大きな紙面にバランスよく配されている。フォルメン線描で養われるバランス感覚や律動はⅡの形式的側面では描かれた事物として，Ⅲの形成的側面では生み出される操作の技法等の方法論として捉えられる。

下段の図4-4と図4-5は四方対象の曲線と直線バージョンである。上段の描き手Ｂは粘液質，下段の描き手Ｃは豪快な胆汁質と理解されており，その気質も描画に表れている[20]。特にＣの図4-4は４つの方向を理解しながらも，形成的な動きのポイントをつかめず，フォルムであれば一本に重なる軌跡が何重にも重なっている。図4-5は確かな方向性と動きが定まり，図と地の空間的な把握に至っている。一方，ノートの後半にある図4-6は８つの結びのある難しい四方対称のフォルムである。時間をかけて形成力を習得するプロセスを確認した。

（3）家庭教育としてのフォルメン線描の実践例

図５群は学校の教室ではなく，家庭でのフォルメン線描実践例の描画群である。Ｄ児の４年生２月から６年生の３月までの記録画像の一部である。登校前の「朝のフォルメン」として，お手玉と音読とを併せた母親の短い提案によって進行した。

①　描画プログラムの実際

直線／レムニスカート／重なりのあるフォルム
上下，左右の対称／円の分割／四面対象他

2019年２月末に開始され，４月は直線やレムニスカートを経て，Ｄの描画の様子をみながら，上下，左右の対称のプログラムが選択された。

図5-1（7-23-19）には「大きな円を，身体を大きく使ってできるようになった」という観察メモが添えられており，４切画用紙に臆せず描いている。きれいな円形を描けなかったり，円の当分割が思うようにいかなかったりした状態から，徐々に形成力を得ている。

図5-2（8-10-19）は，円の16分割と曲線を組み合わせた蜘蛛の巣状のフォルムである。一つ一つの線に力が込められ，Ａ児の几帳面な性格を反映させた緩急のない美しい仕上がりになっている。図5-3（9-4-19）は，レムニスカートから発展させた３点を巡るフォルムである[21]。図5-4（11-20-19）と図5-9（7-20-20）は似ている構図ながら，線質が全く異なる。図5-5，図5-6，図5-7においては，四角形を基にした線対称や曲線の円分割等様々な規則性を基にフォルムが作り上げられている。特に図5-6は複雑な重なりを呈し，平面から三次元へ発展させる形成力を見ることができる。

図5-8（5-26-209）は筆者がＤ児独自のフォルム表出に驚かされた５角形を基にした創作である。この前後に鳥をイメージしたフォルメンに取り組んでおり，畑で遭遇した雉を後ろから追って見た形を基にして作られている。最後の図5-10（7-1-20）は，フリーハンドを中心としたフォルメン線描から幾何学を意識したコンパスの作図に移行している。これらの線描群は基本的には，自身が選択肢の中から決定し，個別のフォルメン線描プログラムといえる。特に，動的なフォルム思考を伴う形成力を確認した。

②　型に沿う図形形成から創作の図形表出へ

上記のフォルメン線描に関して2021年９月に聴き取りによるアンケート調査を行った。３つの設問から「円に対する愛着」，「円の形態を美的に描くためのこだわりの意識」，そしてフォルメン線描の教育的効果として。「自分はへろへろではない線で描画ができる」だけではなく，「平行線や垂直線という空間を律する線を描くことができるようになった」という方法論的認識も得ていることを確認した。さらに中学生の現在，またやってみたいのはフリーハンドのフォルメンと粘土であり，特に形を生み出すことのできる粘土の造形性を求めている。

Ａ児のこの２年間に及ぶ個別プログラムで特徴的

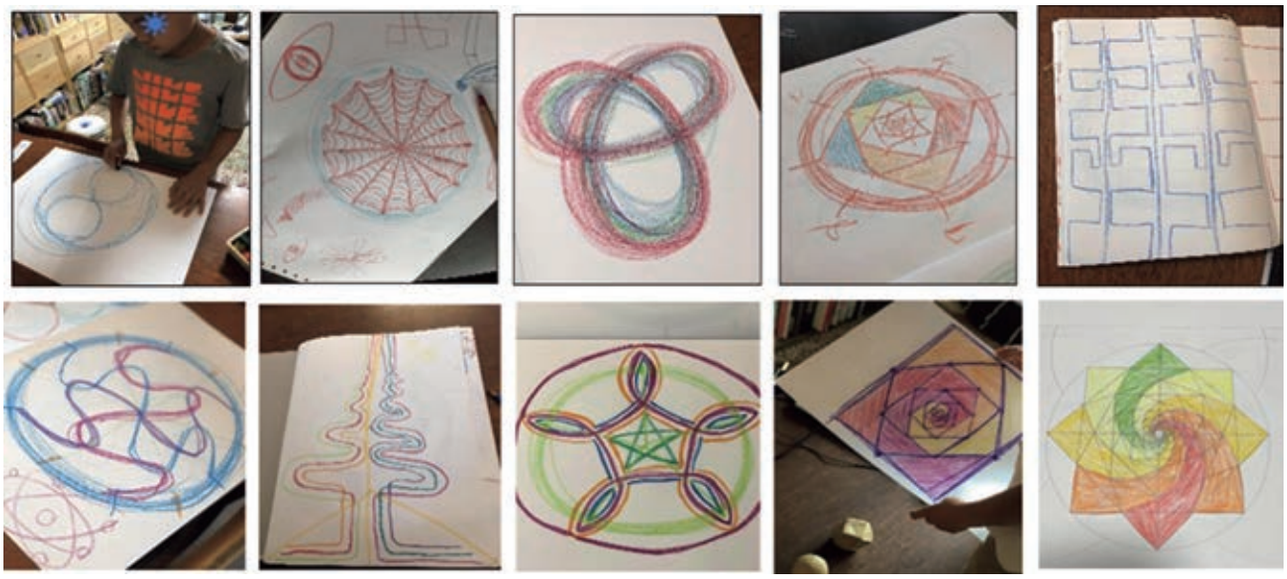


図5-1 ～図5-5（上段）図5-6 ～図5-10（下段）D児の描画例　2019.2.26~2021.3

なのは，6年生の後半の描画内容を，型通りに描く「図形形成」ではなく，ストーリーをもった「図形表出」に移行してその形成力を高めたことである。Ⅱの形式的側面とⅢ形成的側面に重点が置かれたフォルメン線描から，Ⅰ内容的側面に牽引された繊細な軌跡と力強さを引き出し，3側面のバランスのとれた感性的表象を生み出したことを確認した。

表2　聴き取りによるアンケート調査内容

フォルメン線描に関する調査（A児回答内容）
設問1：フォルメンを描くとどんな感覚・感情が浮かび上がってきますか。
・丸が好き，
設問2：フォルメンを描くときに気を付けていることはありますか。
・丸の描き方に気を付けていた。
設問3：フォルメンはあなたに，何をもたらしましたか。また，どんな変化が見られましたか。
・線が真っすぐに描けるようになった。やっていなかったら，フリーハンドでは描けていなかったと思う。美術や絵画の時間に周囲の友達をみると，線がへろへろの人が多いのを見てそう思った。
・同じ幅で平行線や垂直線を引くこともできて絵を描くことも上手にできる。
・フォルメン，コンパス，粘土とやってきたけど，またやりたいのは，粘土とフリーハンドのフォルメン。粘土は，形を変えることができるし，手の中の一つでいろんな形を生み出せるから。

（4）高齢者のフォルメン線描の実践例

茨城県F市にて85歳男性Dと82歳女性Eの夫妻に対して2020年6月～8月に実施したフォルメン線描の描画例66（3枚×22日分）を研究対象とした。

図6群は本来児童対象に構想されたフォルメン線描を，高齢者のリハビリテーションを目的ととして行った描画例である。対象者は，自宅外での歩行が難しい85歳男性Gと82歳女性Hの夫妻，2020年6～8月に1回に40分程かけて会話をしながら各3枚ずつ描く実践を計22回実施した。

図6-1は初回のギザギザ線とゆらゆら線の描画例である。DはB4大の画用紙を前に，空書で手を動かそうとすると手が震えて難しい状況であったが，クレヨンを持つと，とてもしっかり山型の連続模様を描いた。かつて日常生活の筆文字も達筆であったことから，紙上で描画材をコントロールする感覚は確実に残っていたことを確認した。一方，波線は幼児の調査で指摘されたと同様の下側のカーブを滑らかに繋ぐことは難しい様子であった。翌日下側も曲線となることを伝えると，修正点を理解して滑らかな波線となった。（図6-2）

特に抵抗があったのは，内側に向かって回転し，その後戻ることを繰り返すランニングフォルムである。（図6-3）回転を交えた方向転換は難易度が高

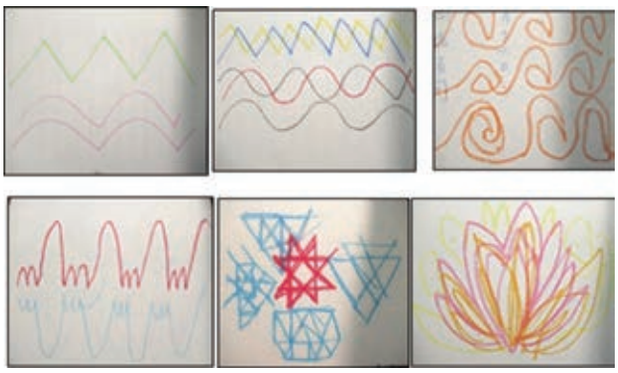


図6-1～6-6　描画例（85歳男性／脳梗塞の病歴有）

いと判断して，これ以後は図6-4のような単純化したフォルムを取り上げた。図6-4は多血質に相応しい下方に着地しながらリズムをもつフォルムである。図6-6は，前出の図4-3と同じ八つの角をもつオクタグラムである。明星を意味しバルト三国の民族衣装等のデザインにも取り上げられていることなどを紹介し，線を重ねて規則性のある形を模索する試行錯誤が見られた。図6-6は，蓮池を訪れた日に描いた蓮の花をイメージした描画であり，Ⅰ内容的側面の充実が図られた事例である。一連のフォルムを描く活動は，Dの日常に活力を与え，それは生活を共にするHを驚かせるものであった。一連の描画活動は，年代を越えて手の動きの調整に働きかけ，形成力向上を促すことを確認した。

4．考　察

（1）大いなる型を学ぶフォルメン線描

４事例で様々な形態を取り上げたように，フォルメン線描のカリキュラムは，学年の認識の仕方に合わせた課題が組まれていた。

１年生は，さまざまな変化による直線と曲線，垂直のシンメトリー，文字の前練習としての線描が描かれる。２年生はレムニスカートとその変形，リズム練習，単純な組紐文，簡単なフォルムの変容に取り組む。

３年生は，外周と中心，中心シンメトリー，水平の鏡像な単純な結びが課題となる。４年生は，与えられたフォルムを補完したり，不完全なものを完全にしたりするバランス感覚に働きかけ，丸みを角ばったものにする等に取り組むという。５年生では，螺旋　螺旋の帯　螺旋の封印やギリシャやエトルリア文化に見られるフォルメン等より幾何学に繋がる課題に移行する。子どもの本質に寄り添った動きを伴った教育内容が検討され，体系化がなされている。

フォルメン線描は，シュタイナー学校という特別につくりあげられた時空間で行う線描教育カリキュラムである。その学びはその場と共にあり，要素だけ移行することは危険性が伴う。本稿でその動きの軌跡を得る身体性と形成力を取り上げた背景には，線を描くことの教育的効果に本質的に迫りたいと考えたからである。

（2）Ⅱ形式的側面とⅢ形成的側面へ強く働きかけるフォルメン線描

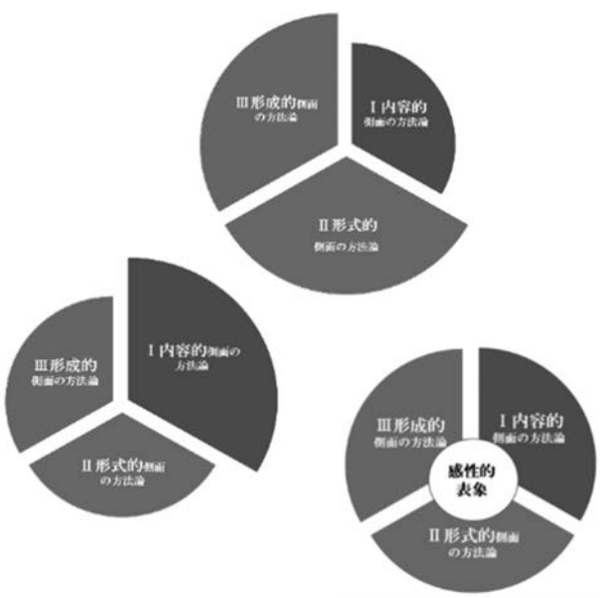
以上，４つのフォルムを描く描画事例から，感性的表象を支える「Ⅱ形式的側面」「Ⅲ形成的側面」の変容過程を中心に検討を行ってきた。紙面に立ち上がってくる様々な形態は，時に大きく歪みながらも，律動の美を備え，美的体験を伴って感性的表象へと変化した。その手の動き，筆圧の強弱，目指す形を生み出すための方向など，様々な要素を統合することが，フォルムをつくりだす形成力であることを改めて確認した。ここで示された身体性を伴った形成する力は，創造活動の基盤として機能していくものである。

本稿で取り上げた４つの描画例のように，シュタイナー学校以外の実践においては，基本的にその描き手に合わせて課題は選択されるべきである。フォルメン線描は大きく，図形形成と図形表出に分けられる。図形形成は，課題が示されそのモチーフを基に学びを深めていく。一方図形形成は，「Ⅰ内容的側面」の表現主題が加味され，よりストーリーを得たフォルム創出となる。既に中学生となったDの示した図形表出は，より創造的なフォルメン線描例といえる。

（2）フォルメン線描における方法論的認識モデル

本稿で示した感性的表象を支える３側面の方法論は，各側面に軽重があったことから，その重点化を図７のように示した。

図形形成は特にⅡとⅢに力点が置かれるため，それらの部分を拡大して示した。（図7-1）また，図形表出は内容的側面の表現主題やテーマが掘り下げられ，活動を牽引することから，Ⅰの部分を突出させた。これらはモデル図であり，現実的には相互に影響し合っている。本稿で検討してきたフォルメン線描の形成力は，形をつくり上げる力であり，事物的レベルの描画から象徴的なフォルムへの上昇を目指している。３側面の方法論的認識もまた，基本図のようにバランスよく構成されるのが理想である。



（上図）図7-1　図形形成モデル図
（左図）図7-2　図形表出モデル図,
（右図）前出の基本図

5．結　論

フォルメン線描を形成力の観点から捉え直すために，その３側面の方法論的認識とその実際を検討した。問題の所在に照らした主な結果は以下の通りである。

①　就学前４，５歳児における「ギザギザ／ゆらゆら」線の描画調査からは，年長クラスにおいて約三分の一の幼児が，山形では角で止まって方向転換すること，波型ではなめらかに曲線を繋ぐことが可能であった。特に顕著だったのは，曲線をなめらかに繋ぐ難しさであり，達成率は41.6％に止まった。下側のカーブにおいて進行方向に進みつつ，回内の軌跡をつくり出すことに関して未分化の様相を確認した。

②　表象群の分析から，①山型の連続紋に比べ波型をなめらかに繋ぐⅢの過程に抵抗がある幼児の描画の実態（４，５歳児の調査），②基本的なフォルムを学びながら，手の運動が次第に調整されていくⅡとⅢの変容過程（第４学年），③型といえるフォルムの描画から次第にⅠを強め，独自の発想のフォルムに移行したＡ児の２年間の変容過程（４年～６年生）④歩行等の身体機能は低下するなかで描画の形成過程は保たれた事例（後期高齢者）が示された。

③　フォルメン線描における形成力は，形をつくり上げる力であり，事物的レベルの描画から象徴的なフォルムへの上昇を目指したものであった。型に習う図形形成から創作の図形表出へと移行し，手の動きの感性的な強弱のコントロールと図と地の空間把握を得て身体化されることを明らかにした。

謝辞

調査に協力いただいた諸氏に感謝を申し上げます。

付記

本研究は，日本学術振興会2021-2024年度科学研究費補助金基盤研究（C）№21K02502〈教師教育における「芸術知」の方法論的解明　－表象と感性の融合を図るプログラム開発〉の研究成果の一部で

ある。

註

1）ルドルフ・クッツリ，石川恒夫訳，1997,『フォルメンを描くⅠシュタイナーの線描芸術』，晩成書房,，P.4

2）髙橋文子，2001,「教育的線描論－フォルメン線描と気質考－」茨城大学大学院教育学研究科修士論文抄録，12，pp.96-98.

3）近藤俊明，渡辺千歳，日向野智子編，2017,『子ども学への招待』ミネルヴァ書房，髙橋文子「線描　と子ども」（第16章）PP.193-204.

4）マルグリット・ユーネマン，フリッツ・ヴァイトマン, 鈴木一博訳, 1990,『シュタイナー学校の芸術教育』，晩成書房，　前文（1923年３月「ヴァルドルフ学校芸術教育大会」における講演「ゲーテアヌム構想－現代の文化危機のさなかで」）

5）髙橋文子，2018,「記憶画の形状ストック指標における形象レベルと感性レベル－モデルの有無による記憶表象の検討－」,『美術教育学』，39，PP.185-196.

6）ハンス・ルドルフ・ニーダーホイザー，髙橋巌訳，1983,『シュタイナー学校のフォルメン線描』，創林社，ニューヨーク，ルドルフシュタイナースクールにて刊行された同初版本は下記の２著者の共著である。

Hans R. Niederhauser, *Form Drawing*, Mercury Press, Spring Vally, New York,1974

Margaret Frohlich, *A Practical Guide to Form Drawing in Waldorf Schools*, Mercury Press Spring Vally, New York,1974

7）エルンスト・ミヒャエル・クラーニッヒ他編著，森章吾訳，1994,『フォルメン　線描の実際と背景』，筑摩書房

8）ルドルフ・クッツリ，石川恒夫訳，1997,『フォルメンを描くⅡ　シュタイナーの線描芸術』，晩成書房

9）Thomas Wildgruber, ,2012, *Painting and Drawing in Waldorf Schools:Classes1-8*, Froris Books

10）エルンスト・ミヒャエル・クラーニッヒ，前掲P.4

11）Waldorf World List 2021によると，シュタイナー学校数の推移は，1919年の開校から約100年を経て，70ヵ国1251校を数える。シュタイナー幼稚園数は59ヵ国1915園であり，日本には７つのシュタイナー学校と14の幼稚園がある。

12）茂木一司, 1983,「フォルメンに関する一考察（１）」,『鹿児島大学研究紀要』，pp.149-174

同「フォルメンに関する一考察（２）」，同，1986, pp.25-46

13）西平正，2005,『シュタイナー入門』，講談社現代新書，西平正，1999,「教育人間学のために５章　シュタイナー教育のアート－内側から動き出すとはどういうことか－」，東京大学出版会，pp.127-150

14）井藤元，2017,「フォルメン線描における自然認識と芸術的創造－シュタイナー教育の道徳的基礎－」,『ホリスティック教育研究』，20，pp.36-63

井藤元，2019,「フォルメン線描とマインドフルネス－脳波測定を通じた分析－」,『ホリスティック教育／ケア研究』，22，pp.61-72

15）フリードリッヒ・シラー，石原達二訳，1977,『美学芸術論集』，冨山房百科文庫

16）吉田奈穂子，2020,「シュタイナー教育における造形教育の実践－日本の公立小学校への図画工作科への導入をさぐる－」，ＮＳＫ出版

17）田中麗香，真木みどり，田上洋子，2018,

『フォルメン線描Formenzeichnen こどもに対してＥＭＤＲ施行時　眼球運動の効果を上げる手法』，秋田精巧堂年

田上洋子，2020,『トラウマからの解放－フォルメン線描とイメージ呼吸』現代書館

18）髙橋文子, 2022,「感性と形象の統合としての『芸術知』の方法論的解明」,『第44回美術科教育学会東京大会口頭発表概要集』，p.2202

19）英国在住の陶芸家金谷智恵子氏の協力による

20）若桑みどり, 1993,『イメージを読む～美術史入門～』，筑摩書房，p.165 四気質論について「軽くて陽気な多血質は空気，はげしくて怒りっぽい胆汁質は火，怠惰で不活発な粘液質は水，暗くて冷酷な憂鬱質は土」と解説されている。

21）「朝のフォルメン／曲線と直線／交わり／均等を意識して自我の力を過去から未来へ／表面から深遠へ」という母親の詩が付されている。齋藤至都氏の「シュタイナーの学びの家庭版」記録より　吉澤明子、石川華代（e-waldorfシュタイナー教育関連講座）らに学び、家庭でのフォルメン線描実践を具現化した。

（たかはし　ふみこ）

【受理日　2022年12月７日】